OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

第４章

グリーン・ツーリズムにおける広域連携体制の可能性

―四国グリーン・ツーリズム推進検討会を事例として―

原　　直行

1．はじめに―課題設定―

日本でグリーン・ツーリズムが提唱されてから15年が経過した。四国でも2000年以降，本格的にグリーン・ツーリズムに取り組む地域が出てきている。このような動きのなかで，四国４県の県庁グリーン・ツーリズム担当課は県域を越える４県連携事業として，四国グリーン・ツーリズム推進検討会を2005年度に設立し，それ以降，４県の一体的PRにより四国におけるグリーン・ツーリズムの推進に努めている。

本論文の課題は，同検討会を事例に取り上げ，県域を越えた広域連携体制の意義と今後の発展可能性について明らかにすることである。それは近い将来において，財政難から同検討会の先行きが不透明であるという状況下で，これまで着実に育ってきた四国４県のグリーン・ツーリズムのさらなる発展と地域活性化のために，今後新たな広域連携体制を構築し，同検討会がこれまで行ってきた各種の連携事業を継続していく必要があるからである。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

以下，本論文では同検討会の役割を説明し，さらに，四国のグリーン・ツーリズム施設を訪問した客に対するアンケート結果を分析し，新たな広域連携体制を構築するための提案を行いたい。

2. 四国グリーン・ツーリズム推進検討会の役割

（1）四国グリーン・ツーリズム推進検討会とは

四国グリーン・ツーリズム推進検討会は2005年に四国４県の県庁グリーン・ツーリズム担当課により４県連携事業として結成された組織である。同検討会で作成された「グリーン・ツーリズム推進に係る四国４県連携事業実施要領」の「趣旨」および「事業実施コンセプト」には同検討会の設置目的，活動内容が端的に示されているので以下に引用したい。

「趣旨」

四国４県は豊かな自然環境に恵まれ，魅力ある農林水産業が根付いているばかりでなく，他にはない四国独自の資産も豊富に分布しているものの，農山漁村においては，過疎化・高齢化が進展するなど，共通する問題点も抱えている。

このため，四国が持つ海，山をはじめ，棚田，里山などの豊かな自然景観，四国遍路のお接待に代表される人情の深さや癒しの風土を活用して，都市と農山漁村の交流を促進するグリーン・ツーリズムを推進することにより，地域の活性化や農山漁村の振興を図ることができるほか，４県が連携し，四国八十八ヶ所等の観光ルートと地域の各種体験メニューを相互に組み合わせることにより，更にＰＲ効果が高く，集客力のあるグリーン・ツーリズムが展開できるものと考える。

「事業実施コンセプト」

事業実施にあたっては，４県の共通課題である企画研究，人材育

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

成，情報発信について連携を行い，効果的・効率的な事業の実施を図っていくこととし，次の点に留意して事業を行う。

① グリーン・ツーリズム関連施設の入込み客の増加につながる施策等の企画研究

② 地域実践者や行政担当者等のネットワークの構築

③ 遍路文化（四国八十八ヶ所）等も活用しながら「いやしの四国でグリーン・ツーリズム」キャッチフレーズにした情報発信

このように四国４県が連携してグリーン・ツーリズム推進による地域活性化や農山漁村振興を図るために，企画研究，人材育成，情報発信について連携して事業を行うというものである。事業予算については，2005年度が各県75万円を負担して合計300万円，2006年度，2007年度は各県50万円を負担して合計200万円となっている。以下，各事業の具体的な内容についてみていこう。

（２）企画研究事業

企画研究事業とは，この四国グリーン・ツーリズム推進検討会の開催（年３回開催）のことである。同検討会ではグリーン・ツーリズムに関わる四国４県連携施策の検討，具体的には以下の２つの事業についての企画研究協議を行っている。

（３）人材育成事業

人材育成事業とは，主に２つからなっている。１つはグリーン・ツーリズム体験指導者の研修支援である。地域を案内し，体験活動を指導するグリーン・ツーリズム体験指導者（グリーン・ツーリズムインストラクター）のための研修会は財団法人都市農山漁村交流活性化機構が開催している[1]。2005年度はこの研修会を松山市にて同機構，四国グリー

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ン・ツーリズム推進検討会の共催で開催し，研修費を参加者１人当たり15,000円とした[2]。また，2006年度，2007年度では同研修会をそれぞれ高松市，徳島県上勝町で開催するよう同機構に働きかけ，実現させた。これまでの四国３ヶ所で開催した研修会で四国４県から約70人の体験指導者を出している。（四国４県全体では約100人）

もう１つは４県連携によるグリーン・ツーリズム体験指導者のネットワーク化である。これはグリーン・ツーリズムを推進するためには，グリーン・ツーリズム実践者の連携が不可欠であることから，４県のグリーン・ツーリズム体験指導者のネットワーク化を視野に，交流研修会を開催している。2005年度は徳島県勝浦町にある農林漁業体験民宿「ふれあいの里　さかもと」で交流研修会を開催した。さらに，2006年度以降は，交流研修会と同時に，都市住民の参加も見込んだ四国グリーン・ツーリズムシンポジウムを開催することとし，2006年度では香川大学経済学部で，交流研修会と同学部と共催で四国グリーン・ツーリズムシンポジウム「四国グリーン・ツーリズムの可能性」（参加者約250人）を，2007年度は松山大学で交流研修会と，愛媛大学・松山大学と共催で四国グリーン・ツーリズムシンポジウム「四国グリーン・ツーリズム・フォーラムin愛媛」（参加者約200人）を開催した。

（４）情報発信事業

情報発信事業も，主に２つからなっている。１つは，都市部での交流イベントへの参加による情報発信である。これは大都市で開催され，都市住民が集う交流イベントに参加し，パネルの展示や各種パンフレット

---

[1] グリーン・ツーリズムインストラクター育成スクールについては，財団法人都市農山漁村交流活性化機構の以下のサイトを参照。
http://www.kouryu.or.jp/school/index.html

[2] 通常は50,000円であるので，実質的に35,000円を補助したことになる。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

の散布などにより四国のグリーン・ツーリズムを一体的にPRするというものである[3]。2006年度は10月に神戸市で行われた「ニッポン全国田舎フェア」に，2007年度は10月に大阪市で行われた「ふるさと回帰フェア2007」に参加した[4]。両イベントとも後述する「四国グリーン・ツーリズム八十八ヶ所マップ」のPRを中心に行った。また，両年ともイベントに参集した都市住民を対象に四国のグリーン・ツーリズムについてのアンケート調査も実施した[5]。

もう1つは，四国遍路に併せたグリーン・ツーリズムモデルの情報発信である。これは2006年に四国遍路ブームに合わせ，団塊の世代の定年者から若者までをターゲットに，四国4県で88ヶ所（各県22ヶ所）のグリーン・ツーリズム施設を選定・作成したマップである「四国グリーン・ツーリズム八十八ヶ所マップ」（タイトル「思いっきり四国！88癒しの旅」）を使って，ツーリズムモデルとして情報発信するというものである[6]。2006年度は同マップを4,100部刷り，さらに2007年度は84,000部刷ると同時に，一層のPRと誘客を目的として「思いっきり四国！88癒しの旅」キャンペーンを実施した。これは同マップに掲載されている88ヶ所の施設でグリーン・ツーリズム体験等を行ったとき，同検討会が発行

---

[3] この他の情報発信として，2005年に旅行情報誌「中国・四国　じゃらん」に4ページにわたり四国グリーン・ツーリズムの情報を掲載した。

[4]「ニッポン全国田舎フェア」は財団法人都市農山漁村交流活性化機構が，「ふるさと回帰フェア2007」はグリーン・ツーリズムフェア開催協議会（財団法人都市農山漁村交流活性化機構と認定ＮＰＯ法人100万人のふるさと回帰・循環運動推進・支援センターから構成）がそれぞれ主催した。

[5] 2006年度の神戸市でのイベント時に実施されたアンケート調査の分析については，原直行（2007）75～97ページを参照。2007年度の大阪市でのイベント時に実施されたアンケート調査の分析については，原直行（2008）1～6ページを参照。

[6]「思いっきり四国！88癒しの旅」，および同マップのキャッチコピー「“うどん”だけじゃない！　“すだち”だけじゃない！　“かつお”だけじゃない！　“みかん”だけじゃない！」は香川大学経済学部の学生が考案したものである。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

したシールを応募ハガキに張って応募すると抽選で各県の農産物・加工品などの特産品が当たるというものである。また，同マップは，四国内では各市町村，各グリーン・ツーリズム関連施設，JR四国の主要駅，四国内の空港ビル，道の駅，観光案内所等に，四国外では四国各県の県事務所（東京，大阪，名古屋），高速道路SA等に配布した。

（5）事業内容のまとめ

このように，企画研究，人材育成，情報発信について連携して事業を行っている同検討会であるが，事業決算の状況をみた第1表からもわかるように，人材育成事業における体験指導者の研修支援，情報発信事業におけるツーリズムモデルの情報発信に力を入れている。とくに，ツーリズムモデルの情報発信は，2005年度から企画研究事業において準備を進め，2006年度から実施しているものであり，同検討会の根幹事業であるといえる。

第1表　事業決算の状況

事　業	内　訳	2005年度		2006年度		2007年度	
		(万円)	(%)	(万円)	(%)	(万円)	(%)
企画研究	—	37.7	12.6	7.1	3.6	5.0	2.5
人材育成	体験指導者研修	152.8	50.9	0.0	0.0	0.0	0.0
	ネットワーク	14.9	5.0	0.7	0.4	7.7	3.9
情報発信	イベント参加等	94.6	31.5	37.2	18.6	17.3	8.7
	ツーリズムモデル	0.0	0.0	155.0	77.5	170.0	85.0
合　計	—	300.0	100.0	200.0	100.0	200.0	100.0

資料：四国グリーン・ツーリズム推進検討会資料より作成。

以上，同検討会の事業内容をみてきたが，市町村レベルではなく，県を越えた広域連携での事業活動はきわめてユニークであり，グリーン・ツーリズム単独での県域を超えた連携事業はおそらく全国的にも他には

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ないであろう。その意味で，同検討会のこれまでの役割は十分評価に値するといえよう。

3．客層の分析

ここでは，2007年度実施の「思いっきり四国！88癒しの旅」キャンペーンで行ったアンケートの分析を行いたい。同キャンペーンは，シールを応募ハガキに張って応募すると抽選で特産品が当たるものであることは既に説明したが，そのハガキには簡単なアンケート項目が付いており，四国でグリーン・ツーリズムを実際に体験した客（応募者）にアンケートを回答してもらうようになっていた。これは，客層の分析により効果的・効率的に真の顧客に対してどのように情報発信するかを明らかにするためである。実際に四国でグリーン・ツーリズムを体験した客を対象に四国４県という広域で分析を行ったことはなく，この分析の意義は大きいと考えられる。アンケートは2007年７月20日から2008年１月10日までの応募期間で，有効回答1,121を得ることができた。

（1）訪問客の特徴

①　住所

訪問客の住所については，第２表によると，四国４県からの訪問客が全体の76.7％を占め，大部分であることがわかる。四国のグリーン・ツーリズムの大部分は四国からの訪問客なのである。また，四国の県別でみると，高知県を除く３県がそれぞれ全体の20％を超えている。

一方，四国以外は全体の23.3％と少ない。四国以外の県別でみると，大阪府（全

第２表　訪問客の住所

	実数（人）	比率（％）
四国４県	860	76.7
うち徳島	234	20.9
うち高知	67	6.0
うち愛媛	262	23.4
うち香川	297	26.5
四国以外	261	23.3
うち大阪	54	4.8
うち広島	48	4.3
うち兵庫	45	4.0
合計	1121	100.0

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

体の4.8%），広島県（4.3%），兵庫県（4.0%）の順で多い。地理的に近く，大都市を有し，人口も多い中国地方，近畿地方からの訪問客が多いことがわかる（第２表参照）。

さらに，訪問客の住所別訪問地（県別）をみた第３表によると，例えば徳島県に住む人が徳島県内のグリーン・ツーリズム施設を訪問した比率が87.6%であるように，その県に住む人が自県のグリーン・ツーリズム施設を訪問する比率は86.5%～95.5%と際立って高いことがわかる。四国のグリーン・ツーリズムの大部分は四国からの訪問客であり，さらに自県のグリーン・ツーリズムの大部分は自県からの訪問客なのである。

また，四国以外の訪問客の訪問地（県別）をみると，比較的分散しているものの，それでも徳島県（37.2%）と香川県（29.1%）が多いことがわかる（第３表参照）。これは両県が中国地方，近畿地方に接していることが大きいと考えられる。表示は省略するが，四国以外の県別で訪問客の多かった大阪府，広島県，兵庫県をみると，大阪府からの訪問客では香川県内のグリーン・ツーリズム施設が38.9%ともっとも多く，広島県では徳島県内のグリーン・ツーリズム施設が64.6%[7]，兵庫県では

第３表　訪問客の住所別訪問地

施設場所	訪問客の住所									
	徳島		高知		愛媛		香川		四国以外	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
徳島	205	87.6	0	0.0	6	2.3	23	7.7	97	37.2
高知	1	0.4	64	95.5	8	3.1	11	3.7	43	16.5
愛媛	2	0.9	3	4.5	239	91.2	9	3.0	44	16.9
香川	28	12.0	0	0.0	9	3.4	257	86.5	76	29.1

注：複数回答

[7] ただし，広島県から徳島県内のグリーン・ツーリズム施設を訪問した客の71.0%は同じ学校の修学旅行で訪問した客である。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

徳島県内のグリーン・ツーリズム施設が64.4％ともっとも多くなっていることからも，中国地方，近畿地方に近い香川，徳島の両県に四国以外から訪問している客が多いことがうかがえる。

② 誰と訪問したか

誰と訪問したかについては，第４表によると，全体では家族（親子）が42.6％ともっとも高く，次いで友人（24.1％），夫婦（13.7％）の順となっていることがわかる。四国のグリーン・ツーリズムには家族（親子）や友人と訪問しているのである。

また，この傾向は四国４県，四国以外でみても変わらない。

第４表　誰と訪問したか

	全体		四国４県		四国以外	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率
	（人）	（％）	（人）	（％）	（人）	（％）
家族（親子）	477	42.6	371	43.1	106	40.6
夫婦	154	13.7	116	13.5	38	14.6
友人	270	24.1	214	24.9	56	21.5
職場	102	9.1	88	10.2	14	5.4

③ 訪問客の年齢

訪問客の年齢については，第５表によると，全体では30代が比率19.9％ともっとも高く，次いで60代（16.5％），50代（15.8％）が高いことがわかる。このように30代と50・60代の２つのピークがある。表示は省略するが，年齢別に誰と訪問したのかをクロス集計したところ，30代は家族（親子）で訪問することが非常に多く，50代，60代は友人，家族（親子），夫婦の順で訪問することが多いことがわかった。

また，四国４県と四国以外とに分けてみた場合，四国４県では全体

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

第５表　訪問客の年齢

	全体		四国４県		四国以外	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率
	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）
10歳未満	98	8.7	76	8.8	22	8.4
10歳代	132	11.8	84	9.8	48	18.4
20歳代	82	7.3	54	6.3	28	10.7
30歳代	223	19.9	169	19.7	54	20.7
40歳代	149	13.3	100	11.6	49	18.8
50歳代	177	15.8	152	17.7	25	9.6
60歳代	185	16.5	161	18.7	24	9.2
70歳以上	68	6.1	58	6.7	10	3.8
不明	7	0.6	6	0.7	1	0.4

に占める比率が76.7％であったことから全体とほぼ同様な傾向がみられ，30代と50・60代の２つのピークがある。一方，四国以外では，30代（20.7％）がもっとも高いことは変わらないが，次いで40代（18.8％），10代（18.4％）が高いのに対して，50代（9.6％），60代（9.2％）は高くない。さらに，この10代が誰と訪問したのかをクロス集計したところ，家族（親子）がもっとも多いが，次いで四国４県と比べて友人が多いことがわかり[8]，修学旅行などで訪問していることを示唆している。

④　何人で訪問したか

何人で訪問したかについては，第６表によると，全体では２～４人が

[8] 10代の訪問客のうち，四国４県からの訪問客の46.4％は家族（親子），14.3％は友人と訪問したのに対して，四国以外からの訪問客の35.4％は家族（親子），27.1％は友人と訪問した。ただし，誰と訪問したかについては無記名の回答が多く，四国４県では41.7％，四国以外では35.4％が誰と訪問したか不明であった。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

51.9%ともっとも高く，次いで5～9人が18.8%，20人以上が13.0%と高いことがわかる。誰と訪問したかのところで，家族（親子），友人で訪問した人が多かったことからも，2～4人の家族（親子），5～9人の友人で訪問していることがわかる。さらに，20人以上での訪問も多かったことから，団体での訪問も無視できない比重を占めていることがわかる。一方，1人での訪問は非常に少ない。

また，この傾向は四国4県，四国以外でみても大きくは変わらないが，四国以外のほうが，5～9人，20人以上の比率が四国4県よりも高く，友人や団体で訪問している客が多いことがわかる。

第6表　何人で訪問したか

	全体		四国4県		四国以外	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
1　人	38	3.4	34	4.0	4	1.5
2～4人	582	51.9	451	52.4	131	50.2
5～9人	211	18.8	154	17.9	57	21.8
10～19人	87	7.8	74	8.6	13	5.0
20人以上	146	13.0	107	12.4	39	14.9

⑤　何回目の訪問か

何回目の訪問かについては，第7表によると，全体では「初めて」が65.7%ともっとも高く，次いで3～5回目（13.2%），2回目（11.2%）の順に高いことがわかる。四国のグリーン・ツーリズム施設を初めて訪問する客が大部分なのである。その一方で，6回以上訪問した客は8.5%と少ないが，2回目，3～5回目もあわせると32.8%となり，リピーターが3割を超えている。ただし，グリーン・ツーリズムでは一般的にリピーターの獲得が重要であるといわれているため，リピーターが3割強という現状に満足してはいけないであろう。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

また，四国４県と四国以外とに分けてみた場合，四国４県では全体よりも「初めて」の比率が61.2％と低く，リピーターが37.3％と高いのに対して，四国以外では「初めて」の比率が80.5％と非常に高く，リピーターが18.0％と低いことがわかる。

第７表　何回目の訪問か

	全　体		四国４県		四国以外	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率
	（人）	（％）	（人）	（％）	（人）	（％）
初めて	736	65.7	526	61.2	210	80.5
２回目	125	11.2	105	12.2	20	7.7
３～５回目	148	13.2	131	15.2	17	6.5
６回以上	95	8.5	85	9.9	10	3.8

⑥　情報の入手先

「思いっきり四国！88癒しの旅」キャンペーン情報の入手先については，第８表によると，全体ではグリーン・ツーリズム施設（体験交流施設）を訪問したときに入手したという回答が89.0％ときわめて高いことがわかる。次いで高いのが道の駅であるが[9]，それでも4.8％と低い。他の入手先については，１％にも満たない。同キャンペーンの情報発信に問題があったことがうかがえる。

また，四国４県と四国以外とに分けてみた場合，四国４県では全体とほぼ同様な傾向であるが，四国以外ではグリーン・ツーリズム施設（体験交流施設）が80.5％と全体，四国４県に比べて低く，「その他」が高い。「その他」は修学旅行のときに学校から配られたというのが多い。「その他」の内容を考慮すると，やはり「思いっきり四国！88癒しの旅」キャ

[9] 道の駅も１ヶ所同キャンペーンのグリーン・ツーリズム施設に認定されている。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ンペーン情報の入手先は圧倒的に訪問したグリーン・ツーリズム施設（体験交流施設）であり，同キャンペーンの情報発信に問題があったといえるだろう。

第８表　情報の入手先

	全体		四国４県		四国以外	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率
	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）
ＪＲの駅	2	0.2	1	0.1	1	0.4
高速のＳＡ	4	0.4	3	0.3	1	0.4
道の駅	54	4.8	40	4.7	14	5.4
体験交流施設	998	89.0	788	91.6	210	80.5
インターネット	2	0.2	2	0.2	0	0.0
空港	3	0.3	0	0.0	3	1.1
観光案内所	5	0.4	5	0.6	0	0.0
その他	41	3.7	12	1.4	29	11.1

（２）訪問施設の特徴

次に訪問施設の特徴についてもみておこう。施設の住所別訪問客数をみた第９表によると，四国各県のグリーン・ツーリズム施設を訪問した客は自県の客がもっとも多いことがわかる。これをもう少し詳細に検討すると，県ごとに多少の相違があり，自県の訪問客の比率がもっとも高い愛媛県では80.5%をも占め，四国以外では14.8%，愛媛県以外の四国３県からは0.7～3.0%と低いのに対して，自県の訪問客の比率がもっとも低い高知県では50.4%と半分に過ぎない一方で，四国以外では33.9%，高知県以外の四国３県からは徳島は低いものの，香川県8.7%，愛媛県6.3%と他県からの訪問客も多いことがわかる。この差は，高知県の場合，高知県以外の四国３県と比べて自県在住の訪問客が少なく，それが他県からの訪問客の比率を高めている要因であると考えられる。

なお，参考までに応募者が多かったグリーン・ツーリズム施設の上位

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

10施設を載せておく[10]。(第10表参照)

第9表　施設の住所別訪問客数

訪問客住所	施設の住所							
	徳島		高知		愛媛		香川	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
徳島	205	61.9	1	0.8	2	0.7	28	7.6
高知	0	0.0	64	50.4	3	1.0	0	0.0
愛媛	6	1.8	8	6.3	239	80.5	9	2.4
香川	23	6.9	11	8.7	9	3.0	257	69.5
四国以外	97	29.3	43	33.9	44	14.8	76	20.5
計	331	100.0	127	100.0	297	100.0	370	100.0

注：複数回答

第10表　応募者が多かった体験施設

順位	人数	施設名	住所
1	61	体験学習館マーレリッコ	香川県東かがわ市
2	58	阿波和紙伝統産業会館	徳島県吉野川市
3	55	農家民宿「グリーンツーリズム　ログ立山」	愛媛県内子町
4	45	(有)「木嶋水産」	愛媛県伊方町
5	42	農家レストラン「でべそおばちゃんの店」	愛媛県上島町
6	40	ふるさとの家	香川県東かがわ市
7	37	吉原ふれあい交流館「百日紅」	高知県高知市
7	37	道の駅「土佐和紙工芸村」	高知県いの町
9	33	ふれあいの里さかもと	徳島県勝浦町
10	32	佐那河内果樹オーナー園主会	徳島県佐那河内村
10	32	民宿「あまごの里」	愛媛県大洲市

[10] この応募者が多かった施設が年間の訪問客数の多い施設とは限らない。このキャンペーンを各施設がどれだけＰＲしたかによるものと考えられるからである。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

（3）アンケート分析のまとめ

アンケート分析の結果をまとめておく。四国のグリーン・ツーリズムの大部分は四国からの訪問客であり，さらに自県のグリーン・ツーリズムの大部分は自県からの訪問客である。一方，四国以外からの訪問客は少ないが，そのなかでは大阪府，広島県，兵庫県のように，地理的に近く，大都市を有し，人口も多い中国地方，近畿地方からの訪問客が多い。誰と訪問したかについては，多くが家族（親子）や友人と訪問している。また，訪問客の年齢については，四国４県からの訪問客では30代と50代・60代の２つのピークがあるのに対して，四国以外では，30代・40代，10代が多く，50代・60代は多くない。さらに，何回目の訪問かについては，初めて訪問する客が大部分であり，複数回訪問しているリピーターは３割程度である。情報の入手先については，グリーン・ツーリズム施設を訪問したときに入手したという回答がきわめて高く，同キャンペーンの情報発信に問題があったといえる。また，施設の住所別訪問客数では，四国各県のグリーン・ツーリズム施設を訪問した客は自県の客がもっとも多い。

4．新たな広域連携体制構築の可能性

（1）四国グリーン・ツーリズム推進検討会の今後

これまで四国グリーン・ツーリズム推進検討会による県域を越えた４県の広域連携事業をみてきた。同検討会は2008年度については高知県が幹事県となって，各種事業が継続される予定である[11]。だが，各県とも財政難のため，同検討会が2009年度以降も継続されていくかは先行き不

[11] 同検討会は，2005年度は愛媛県，2006年度は香川県，2007年度は徳島県が幹事県となって，進められてきた。2008年度に高知県が幹事県になることによって，４県が１度ずつ幹事県を担当したことになる。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

透明である。少なくとも事業予算の大幅な削減が予想される。

しかし，県域を越えた四国４県による大変ユニークな広域連携事業について，人材育成事業における体験指導者の研修支援，情報発信事業におけるツーリズムモデルの情報発信など，これまでの事業活動は十分評価に値するし，予算削減とともにこれまでの蓄積を台無しにするようなことは，徐々にではあるものの，着実に育ってきた四国４県のグリーン・ツーリズムのさらなる発展と地域活性化のためにも取るべきではない。現在（2008年２月末現在），同検討会では各県が意見を出しあって，広域連携体制を模索しているところである。

そこで考えられるのが，同検討会のこれまで行ってきた事業を引き継ぐ形での，新たな広域連携体制の構築である。具体的には，四国４県のグリーン・ツーリズム実践者自身によるネットワークの形成とネットワークによる広域連携事業の実施である。同検討会は広域連携による四国４県の一体的PR等によって四国４県のグリーン・ツーリズム推進を行ってきたが，今後は行政頼みではなく，グリーン・ツーリズム実践者自身による推進が必要であり，また，社会からも要請されている。以下では，これまでの分析を踏まえて，この新たな広域連携体制の構築のための提案を，１つは同検討会における2008年度の事業，もう１つは四国４県グリーン・ツーリズム実践者のネットワークの形成という，２つの点から行い，広域連携体制構築の可能性を探りたい。

（２）四国グリーン・ツーリズム推進検討会による新たなツーリズムモデルの情報発信

先ず，同検討会の事業のなかで，グリーン・ツーリズム実践者自身によるネットワークと連携・継続していける事業についてである。具体的には，これまでの「四国グリーン・ツーリズム八十八ヶ所マップ」に代わる新たな四国グリーン・ツーリズムマップを作成することである。こ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

れは2008年度における同検討会の情報発信事業のなかで取り組むべきもので，マップの作成と作成後の活動内容については，以下のようである。

① キーワードは「自然・農村」，「体験」，「食」とする。ただし，これまでのマップをいかした形で作成する。

② ターゲットは四国４県の都市部の小学校・中学校，近畿・関東地方の都市部の中学校・高校とする。具体的には，四国４県内に対しては小学校・中学校における総合学習，夏休みの課題，自然体験，食農教育を，近畿・関東地方に対しては中学校・高校における修学旅行をターゲットとする。その他に，四国４県の生協，ボーイスカート，企業のキッズクラブ等にも情報を発信する。

③ 四国グリーン・ツーリズムの体験，宿泊を中心に，生徒の受入ができる施設（個人でも可）の体験内容，収容人数，受入時期，特色，修学旅行モデルコース（他の観光施設も含む）などをマップに載せる。ただし，マップに載せるためには，後述するグリーン・ツーリズム実践者のネットワーク組織に加入し，会費を納めることを条件とする。

④ マップ作成後，関係教育機関，（財）日本修学旅行協会，農協観光等の旅行エージェントに配布・売込を行う。

⑤ マップ情報を各県のグリーン・ツーリズム関連ホームページに掲載する。新たに四国グリーン・ツーリズム推進検討会のホームページを作成できればそちらにも掲載する。

⑥ 2008年度は同検討会が窓口対応するが，2009年度以降は徐々に機能を後述する実践者のネットワーク組織に移していく。

というものである。さらに，提案理由については，

① 先の「思いっきり四国！88癒しの旅」キャンペーンのアンケート分析によると，客の77％は四国４県から来訪しており，また家族連れのグリーン・ツーリズム体験が全体の43％ともっとも多いことから，四国４県内に住む家族連れはグリーン・ツーリズムの有力なターゲット

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

である。にもかかわらず，なかなかグリーン・ツーリズムの情報が家族連れに届かないという現状を踏まえ，また，昨今の教育における自然体験や農村体験，食農教育の重視という情勢から，先ず学校機関をターゲットとしてＰＲするという戦略である。学校教育の一環として，グリーン・ツーリズム体験をしてもらい，そのときの楽しさを両親・祖父母に伝え，家族連れで再訪してもらうというものである。

② 同キャンペーン，神戸や大阪の都市住民を対象としたアンケート分析によると[12]，近畿・関東（とくに近畿）も有力なターゲットであるものの，四国４県内よりも情報発信が難しい。近畿・関東の修学旅行生をターゲットにすることはこの情報発信の難しさを部分的に克服できる。

③ 四国全体のグリーン・ツーリズム情報を掲載するというスケールメリットをいかせる。各市町村が単独で修学旅行などの誘致のための誘致活動を行うのに比べて，四国４県のまとまった情報発信というスケールメリットがいかせ，情報の発信側（グリーン・ツーリズム実践者）にも受け手側（学校・生徒）にも大きなメリットがあると考えられる。

④ 市町村や施設単独で宣伝するよりも，このマップのほうが誘客効果が高いという実益により，理念だけでないネットワークの組織化の必要性をグリーン・ツーリズム実践者に訴えることができる。

⑤ 同検討会の比較的まとまった予算を使い，その後，グリーン・ツーリズム実践者によるネットワークに連携・継続していくことができる。

以上のことがあげられる。

（３）四国４県グリーン・ツーリズム実践者のネットワーク形成とネットワークによる広域連携事業の実施

次に，四国４県グリーン・ツーリズム実践者のネットワークの形成に

[12] 原直行（2007），原直行（2008）を参照。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ついてである。具体的には，2008年度にグリーン・ツーリズム体験指導者（グリーン・ツーリズムインストラクター）を中心とした実践者のネットワークを立ち上げ，四国グリーン・ツーリズムの推進検討と連携・協働で以下の事業を実施していき，徐々に同検討会の事業を引き継いでいくというものである。（下線部は同検討会にはこれまでなかった事業内容である）

① 企画研究事業

- 実践者ネットワークのあり方について検討
- 実践者ネットワークの予算確保のための努力（会費および一部国庫補助を利用）

② 人材育成事業

- 実践者ネットワークの組織化
- グリーン・ツーリズム体験指導者の研修支援
- 交流研修会の開催
- メールマガジン等で実践者に研修会，イベント等の情報発信

③ 情報発信事業

- 都市部での交流イベントへの参加
- 新たなグリーン・ツーリズムモデルの情報発信（四国グリーン・ツーリズム推進検討会の新たなマップとの連携）
- 実践者ネットワークのホームページの開設とブログ等による客との双方向コミュニケーションの実現

5．おわりに

これまでみてきたように，県域を越えた広域連携による四国４県の一体的ＰＲ等によって四国４県のグリーン・ツーリズム推進を行ってきた四国グリーン・ツーリズム推進検討会の意義は，供給側のグリーン・ツーリズム実践者にとっても，また需要側の客（都市住民）にとっても大きいと

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

いえる。しかし，財政難などのため，いつまでも行政に頼ることはできない。また，地域住民自身による地域自立型の地域づくりの重要性が主唱されている今日にあっては，行政に頼り続けてもいけないだろう[13]。ただし，県域を越えた広域連携の場合，地域住民というまとまりで動いていくことがきわめて難しいことも事実である。おそらく，理想的な広域連携体制は，地域住民であるグリーン・ツーリズム実践者が主導権を握りつつも，県レベルの行政が人的側面とある程度の資金面で支援していく形態であることが有効であると考えられる。広域連携体制構築に向けての模索は始まったばかりである。

〈参考文献・参考サイト〉

四国グリーン・ツーリズム推進検討会各種資料

小田切徳美「自立した農山漁村地域をつくる」大森彌ほか『自立と協働によるまちづくり読本』，ぎょうせい，2004

原直行「都市住民のグリーン・ツーリズムに関するニーズ分析」香川大学経済学部ツーリズム研究会『新しい観光の諸相』，美巧出版，2007

原直行「四国グリーン・ツーリズムに関するニーズ分析」，香川大学経済研究所Working Paper Series No.129，2008

財団法人都市農山漁村交流活性化機構
http://www.kouryu.or.jp/school/index.html

[13] 地域自立型の地域づくりの重要性については，小田切（2004）を参照。